

CANDANA

No.303

2026

SUMMER

中央学術研究所



てらもうでいっぷく

明日への提言

仏教の知識と善知識——AIを超える視座——

下田 正弘 (武蔵野大学教授／東京大学名誉教授) p.2

研究所だより

学術研究室事業報告 p.7

ある「あおぞら図書」の風景から

渋谷 恵治 (学術研究室) p.12

仏教の知識と善知識 ——AIを超える視座——

下田 正弘（武蔵野大学教授／東京大学名誉教授）

ロンドン講演での質問から

先月六月半ば、ロンドンで一般市民に向けて仏教の講義をする機会があった。週末の土、日、二日間で三講座という、聴講者にもハードなスケジュールだと思われるものの、聴衆の熱意には圧倒させられた。講義中、文字どおりわき目もふらず集中して聞きつづけられたのみならず、講義後の質問がきわめて活発だった。仏教におよそなじみのない異文化、異宗教のなかで生まれ育ちながら、人生の意味を仏教に問おうとする真摯な姿勢が伝わってきた。それにいかに応えることができるのか、あらたな課題に直面させられる経験だった。

ところで、質問を受けるなかでひとつ驚いたことがある。聴衆の多くがいわゆる生成 AI に対する強い危機感を抱いていたことである。聴講者は英国ばかりではなく、ドイツ、フランス、ベルギーなど欧州の複数の国々にわたっていた。講義後に質問にこられたのは、いずれも四、五十歳代とおぼしき女性たちだったが、こぞって示された危惧は、「子どもたちの世代は、ここでお話いただいたような仏教の世界を、AIに尋ねて理解するようになると思う。それでは誤った情報に誘導される危険があるばかりでなく、そもそも人間が意味をなくしてしまうのではないか。いったいどのように対応すればよいと思うか」というものだった。

同様の懸念は、これまで日本においても耳にはしてきた。けれどもその切実さの度合いがはるかに高い。じっさい、西

洋では法律によって子供たちにSNSの利用を制限したり、年齢を限って禁止をしたりする国が出てきている。危機意識が個人を超え、社会、国レベルとなっている。

さて、聴衆の質問にたいする私の回答はいたってシンプルなものである。情報が関係する当事者に直接に会い、虚心坦懐に話を聞き、話をする、それを忍耐よくつづけてゆく、というものだ。あまりに素っ気ない話に聞こえるかもしれない。けれども対面による直接の対話は、間接的に手にした知識に依拠することからは得られない実感が手にはいる。それは、結果の善し悪しを超えて、問題を有するひとに向きあうための確かな拠り所となる。

ここで大切なことは、好ましい成果であれ、困った問題であれ、それはつねにそれを有するひととともに存在するものであって、成果や問題が単独に存在しているわけではないことである。問題のみが存在するのは、知がつくりだす二次的世界におけるできごとである。とすれば、いかなるものであれ、問いは、そのみに注目して対処するのではなく、それがかかえる当事者を予想し、それとともに解決が図られなければならない。ここに人間にとっての大事な問題のありようがある。

知識の不確かさとその介在

AIが生み出すかに思える問題は、さしあたって二つある。ひとつは、根拠の不

確かな情報が流布されてしまうことであり、もうひとつは、ひとを介することなく個々人の理解と行動が進んでしまうことである。だが、じつは、これらはいずれも AI に特有の問題ではない。人間に普遍的な問題なのである。前者からみてみよう。

根拠の薄弱な知識やニセの情報に踊らされ、判断を誤ってしまうこと——これは、そもそも知識に依存する人間の社会にとって、避けることのむずかしい問題である。AI の登場によって、たしかにその弊害が加速されてゆくことはありうるだろう。だが問題自体は AI によって引き起こされているのではない。どの時代においても、知識が完全であったためしはない。ひとは不完全な、ときに偽情報のただなかで生きていかねばならない。それはいまでも今後も変わらない。

振りかえてみれば、仏教が成立した当時の古代インドに流布していた知識には、およそ迷信としか言えないものが多くなくない。ブッダ自身、そうした環境から自由だったわけではない。信頼しえない知識のただなかで身を置かざるをえなかったにもかかわらず、覚りは実現している。

ブッダの覚りは、たしかに「真実の知」と言われてはいても、当時の誤った知識や情報を正すことで達成された知ではない。いま一般に理解されている知とはことになった、真であるか偽であるかに関わらない仏教の〈智慧〉がある。これを明らかにする必要がある。

AI が生み出すかにみえるもうひとつの懸念がある。ひとを介さずして人間関係にもとづく行動が形成されてゆくことである。ただ、これも AI 固有の問題ではない。いわゆる「オレオレ詐欺」や「還付金詐欺」、さらに「国際ロマンス詐欺」などの特殊詐欺がいまだに後を絶たな

い。これらはいずれも通信媒体をとおし、音声やメッセージによって接近が図られやりとりがなされる。この過程で生身のひとと会うことはない。ひとが現れるときは、本人ではなくつねに代理人であり、それもほとんど最初にして最後である。つまり犯罪行為が完了するまでのあいだ、当時者は隠れたままであり、ひたすら知が提供する〈意味〉の交換がなされている。

〈知〉とそれが提供する〈意味〉の理解によって行動が置きかえられ、現実が覆われてしまう。もしも、ことの発端当初から当事者と会ってやりとりができていれば、事件はすくなくならず未然に防ぐことができているかもしれない。ここに知性を有する人間の問題がある。

もの・こと（存在）、こころ（意識）、ことば（言語）という位相

AI が引き起こしているかのようにみえる現在の問題は、人間の〈知〉がつくりあげる〈意味の世界〉の内部において起きている。知が意味をつくり、その意味にひとの世界が見いだされてしまうこと、それは古代から現代にいたるまで変わることがない。知によって表された意味が人間の世界そのものとなるという、どこかで本末が顛倒したようなこの事態を明らかにすることによって、AI の問題にも見とおしが得られるはずである。これこそまさに仏教が問いとするところなのである。

仏教がとらえるところによれば、通常の人間——ブッダからみれば迷いのなかにある衆生——にとって、この世界は、外に存在する〈もの・こと＝存在〉と、それを自身の内に写してかかえ持つ〈こころ＝意識〉と、これら両者を表現する〈ことば＝言語〉、というありようによって成立している。ときどきに交互に入れ

替わりながら現れてくる、これら三つの位相のなかで、じっさいには、〈ことば＝言語〉が他の二者を先導し、〈知〉を構成してゆく。

常識的にみれば、外にモノが存在し、ついで意識がそれを写しとり、最後に言語がそれをことばにする、という順序を想定するのが穏当におもえるかもしれない。だとすれば、〈もの・こと＝存在〉が知を構成することになる。だが、すこし反省すればこの想定は不十分である。モノの存在が確定されるためには、意識においてそれが明瞭に判別されていなければならない、意識がそれを判別するためには、そのモノは他と明瞭に区別される概念として規定されなければならない。そのためには言語の存在が必須となる。

逆に、じっさいに外にモノのとして存在が確定されていなくとも、明瞭なことばとして存在し、それが意識において鮮明に判別されているならば、それは存在するものとみなされる。西洋哲学における存在論の核心をつくってきた〈神〉の存在こそ、まさにその代表であろう。一神教において神は偶像化することが認められていない。つまりモノとしてはいかなるありようでも存在することができない。したがって、意識のうちにもなんらかのすがたとして現れることは斥けられなければならない。こうした神は、なによりも言語として、そして知として存在する。

知がこうした重要な機能を果たすのであれば、ひとが世界を把握するためには、言語をとおして知に至ることがなにより重要になる。ことに、文明が進展し、知性が開発されればされるほど、この理解は動かしがたいものとなる。ひとが直接に当事者と会うことなく情報の交換のみで行為をなしてしまうことは、ここに淵源する問題である。

知の限界と仏教による相対化

仏教は知性が生み出す問題を鋭く解明している。仏教思想を成熟した表現で示す大乘仏教にこの問題を尋ねてみよう。〈空〉の思想によれば、あらゆる存在はつねに変移しつづける幻のようなものであるにもかかわらず、ひとはそこになんらかの不変の本質が宿されているものと想定する。ひとつのモノがそのモノでありうるためには、そのモノをそのモノたらしめているなんらかの実体、すなわち本質がなければならないという理解である。これは古代ギリシャ以来こんにちまで西洋の哲学を規定する基礎となっている。アビダルマという仏教の教義学の一部においてもその理解がある。

だがそれは、大乘仏教によれば、妄想の域を超えていない。変わることをない本質とは、構想された観念にほかならず、言語存在以外のなにものでもないからである。〈もの・こと＝存在〉がつねに変移するものであれば、それを写しとるひとの〈ころ＝意識〉も、同様に移りゆく幻のようなものとなる。いずれも信頼できるものではない。

知識とは、この存在と認識の関係を言語的に表現したものにはほかならない。その知識の信頼度は、まずはこの両者の関係把握がいかに恣意性を離れ、まっとうな筋道で立てられるものであるかにかかっている。仏教においては、この問題について、正しい知識根拠〈量〉 *pramāṇa* をめぐる考察として、きわめて精緻な議論が積みかさねられ、インド哲学全体の深化にも大きな影響を与えてきた。

とはいえ、これら両者の関係の描き方がいかに正当に確保されても、そもそも存在とそれを映す意識とが幻のように実体を欠いたものだとなれば、これら両者によってなりたつ知識自体も信頼しえないものとならざるをえない。大乘仏教に

においては、究極的真理である〈勝義諦〉と世俗において認められる〈世俗諦〉とが区別されているが、知識論はこのうち〈世俗諦〉に属する。正しい知識は、覚りと異なっており、覚りは、正しい知識に包摂されていないのである。

仏教において、あらゆる知識は実体のない〈空〉なるものであると同時に、つねになにかの〈もの・こと〉——仏教の表現では〈色〉——として把握されている。ここには情報や知識を正面からとらえつつも、そこに巻き込まれずに観察するまなざしがある。この仏教の到達点からみれば、AIが与える誤情報であっても、真実の目覚めの実現には究極的に影響を与えない。

ハリューシネーションを修正してゆくという専門知に与えられたミッションは、目のまえの〈色〉の認識の限界や誤りを見ぬき、その意味を解体するとともに、より正しいとみられるもうひとつのあらたな〈色〉を立てるところにある。専門知は、こうして無限に修正を重ねながら〈色〉を立てつづけることで成立するものであり、あらたな意味のなかにひとを巻きこんでゆく。こうした〈知〉は〈空〉という究極には立ちえない。

身・口・意の三業

仏教は、その教えの中心に、存在と意識と言語によって成立する〈知〉にきわめて近い要素を立てている。〈身・口・意〉の〈三業〉といわれるものである。〈業〉karmanは、行為と行為が遂行された後に与える影響との両方を含意する術語である。仏教は、キリスト教などの一神教とはことなっており、この世界を創造した特別な存在である〈神〉を立てることがない。この世界が構成され、成りたてゆくの、生きとし生けるものたちがなす〈業〉の力による。

この業には、身体的行為である身業、言語的行為である口業、そして意識的行為である意業という、三つの種別がある。それぞれは、身業が外的な〈存在〉に相当し、口業が〈言語〉にあたり、意業が〈意識〉に相当する、とひとまずは理解してよい。だとすれば、三業による世界と自己の成立を説く仏教は、すでにみた〈知〉の成立による世界と自己の成立の主張と、重なりあってしまうようにみえるかもしれない。けれどもじつはそうではない。ここにはきわめて重要な差異がある。

すでにみたように、知は、現実から離れた独自の意味の世界をつくりあげてしまう。それは、現代の知が、西洋思想の影響を強く受け、言語に独占的な力を与えてしまっていることによって生まれている。「はじめにことばありき」という『ヨハネ福音書』の冒頭の一節がしめすように、神は当初よりことば（ロゴス、理性）とともに存在し、そのほかのあらゆる存在はこれによって導かれてゆくのである。AIはまさにそれを先導して実現しつつある。

それに対して仏教が説くところの三業は、言語化される精神のはたらきに独占的な位置を与えてはいない。なににおいても仏教がめざすところは、身口意の三業の〈一致〉である。言語として表現されたもの、口業によって果たされたところ、すなわち〈知〉によって描かれたところは、かならずや、身業と意業とにおいて実現されなければならない。言語による意味の構築と理解がいかに精緻に深遠になされようとも、身業と意業とが取りのこされたままであれば、そこに生ずる〈ずれ〉によって、三業の全体は混乱し、ひとえに迷いが深まってゆく。

人間の存在は、ロゴス、意味によって尽くされるものではない。口業が、こと

ばが不変の意味世界や永遠を実現しようとも、身・意の業は、生老病死という厳然たる事実とともにある。これら全体が一致しなければ、妄想され倒錯した世界を、ひとは生きてゆかざるをえないことになる。この顛倒から解放し〈自然〉のすがたに回復させるものこそ、無常、無我、空という仏教の教えである。消極的に聞こえるこれらのことばには、壮大な装置の束縛から解放させるための、等身大の慈悲の力がある。

仏教の智慧と善知識

自然科学であれ、社会科学であれ、人文科学であれ、近代の知の世界は個々の問題を独立して分析して抽出し、その解決を図ろうとしてきた。それはたしかに大きな成果を手に入れ、人類の福祉向上に貢献してきた。いま出現している生成AIは、その最先端にあるものかもしれない。

だが、その一方で、あらゆる問題は、問題をかかえるひととともに存在しているという厳然たる事実がある。問題の解決は、問題単独ではなく、それを有する

ひとの身のうえの問題解決でなければならない。その身とは、生老病死をかかえた、わずか一尋の大きさである。ひとの問題は、身口意の三業というかたちで現れている。このありようを一致に導くことができる道があれば、それはいかに些細なものにみえても、たしかに信頼しうる道なのだ。壮大な知の世界は、この身の問題を取り残し、すべてを観念に置きかえてゆこうとしている。仏のさとりの世界は、かぎりあるこの身をかかえた、ひとにおいて成就する。知において完成されるのではない。

たとえ知的理解から開始されたとしても、仏教に出あうためには、もういちどその道に立つひとに出あう必要がある。『華嚴経』や『涅槃経』が明確に宣言しているように、仏教における真の〈知識〉は〈善知識〉である。仏の智慧の世界は、ひととして実現しているのである。

◆プロフィール◆

下田 正弘（しもだ まさひろ）

1957年生。現在、武蔵野大学教授、東京大学名誉教授。SAT大蔵経テキストデータベース研究会代表。東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専門分野修了。博士（文学）（東京大学）。インド仏教における聖典形成史を考究する一方、大蔵経のデータベース化を進め日本で有数の人文学の知識基盤に成長させるとともに、日本に人文情報学（デジタルヒューマニティーズ）を導入する。この間、ロンドン大学 SOAS 客員教授、スタンフォード大学客員教授、ウィーン大学客員教授。日本印度学仏教学会理事長、日本デジタルヒューマニティーズ学会会長、パーリ学仏教文化学会会長を歴任。主著として『涅槃経の研究——大乘經典の研究試論』（春秋社）、『仏教とエクリチュール——大乘經典の起源と形成』（東京大学出版会）、編著として『新アジア仏教史』（全15巻）（佼成出版社）など多数。



1. 研究

(1)開祖研究

①基本計画の策定

ア.「開祖さま研究」スタッフ打ち合わせ
森章司先生（東洋大学名誉教授）指導のもと、「開祖さまご法話資料集」のデータベース構築に向けて、スタッフ内で「開祖さまご法話資料集」の項段落分け作業の調整会議を月1回のペースで実施

②釈尊と法華経研究会 都合により開催せず。

(2)校成教学研究

①在家仏教の研究

ア. 研究会の開催
(ア)「縁起論争資料講読研究会」の開催（月2回）
(イ)「ブッダの教えと生涯」研究会の開催（月1回）
イ. 学習会の開催
(ア)「仏教思想論文献講読会」（Ⅰ）の開催（41回）
(イ)「仏教思想論文献講読会」（Ⅱ）の開催（44回）
(ウ)「仏教思想論文献講読会」（Ⅲ）の開催（8回／10月～12月）
(エ)「仏教思想論文献研究会」の開催（月1回）
(オ)「仏教図書編集勉強会」の開催（月2回）
(カ)「信仰生活者研究会」の開催（2回）
(キ)「古典サンスクリット文法と講読」の開催（11回／7月～12月）

ウ. 定学の研究

(ア)禅研究会への参加（月1回）
禅指導：山口博永・不老山能忍寺（千葉県館山市）住職

エ. レポートの作成

(ア)『DHARMA WORLD』2025年秋号：‘Changes in the Significance of Music in Buddhism’（邦文仮題：「仏教における「音楽」の意義の変遷」）

②原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究

ア.「原始仏教経典にみるブッダと如来」の原稿作成（森先生）
イ. ホームページの随時点検作業

(3)教団史研究

①教団史研究会

ア.『創立80年史』（仮称）研究会の開催（年4回：3月、6月、9月、12月）

講師：船岡誠先生（北海学園大学名誉教授）・菊地大樹先生（東京大学史料編纂所教授）

イ. 史料編纂のための打ち合わせ（年3回：3月、10月、11月）

ウ. 寄贈資料・収集資料の調査研究とデジタル化（随時）
東日本大震災関連資料調査・聞き取り（於：仙台教会）
7月31日～8月1日（菊地先生・橋本雅史所長・會澤健裕室員）

②アーカイブズ

ア. アーカイブズ推進委員会（月1回）
イ.「立正佼成会デジタルアーカイブ」構築に伴う共同業務（週2回）
ウ. 調査・研究
エ. 庭野日鑑会長米寿記念参拝「スタジオ日鑑」への参画
日時：3月19日、4月19日、5月19日、6月19日、7月19日、8月19日、9月19日、11月19日

参加者：橋本所長、宇野哲弘室長、佐々木稀世室員、北村友里江室員、渋谷隆市室員、會澤室員、今井里枝館員、中戸佐江子館員、吉岡良祐館員、北村浩一課長、下田佳子課員、川瀬理子課員（校成出版社 ICT 事業部アーカイブズ課）

内容：茶々タイム（橋本所長の講話）、庭野会長関連資料の展示・紹介、葉配布、立正佼成会デジタルアーカイブの紹介など。

③教団史研究

ア. 関係者の聞き取り（月1回程度）
イ. 教学研究関係

(4)布教研究

①宗制・宗憲に関する基礎研究

ア. 宗教法人法勉強会の開催
日時：2月25日（第4回）
5月27日（第5回）
8月27日（第6回）
11月13日（第7回）

場所：佼成図書館 視聴覚ホール
内容：宗教法人法についての、長谷川正浩弁護士による逐条的な解説

参加者：本部職員（習学部、時務部、総務部、教務部、中央学術研究所から、所属長、スタッフ含め各回約30名）

②法華経における文献学的実証研究の推進

ア. 研究成果・学会発表など

- (ア)文部科学省の外郭団体である日本学術振興会から、文部科学省科学研究費補助金基盤C（一般）研究として、これまでに推進してきた一連の法華研究が西康友主幹を研究代表者とする文科省指定課題研究となっている。この研究を継続した（2025年度まで）。指定研究課題は「梵文法華経諸問題解明のための基盤テキスト構築－『ケルン南條本』校訂へ向けて」。詳細は以下のURLを参照：<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-21K00058/>
- (イ)西主幹・黛千洋『スッタ・ニパータ、ダンマパダ、テーラガーター、テーリーガーター、マハーヴァスツアヴァダーナ、ラリタヴィスタラ、梵文法華経 並行・類似詩脚索引』（*Suttanipāta, Dhammapada, Theragāthā, Therīgāthā, Therīgāthā, Jātaka, Mahāvastu-Avadāna, Lalitavistara, and Saddharmapuṇḍarika, Parallel and Similarity Pāda Index*）『大乘仏教思想叢書』（*Philosophica Mahāyāna Buddhica*）第10号を発刊（1月17日付）。
- (ウ)西主幹「梵文法華経『ケルン・南條校訂本』ローマ字本・脚注補完第4分冊」（*Saddharmapuṇḍarika Kern-Nanjio's Edition in Roman Script with Complementary Footnotes Kern-Nanjio's Edition Romanized Text IV*）『大乘仏教思想叢書』第11号を発刊（5月15日付）。
- (エ)西主幹「『ケルン・南條本』に用いられた梵文法華経写本の類似性－レーベンシュタイン距離を応用したネパール写本の系統分類の試み」『印度學佛教學研究』第73巻第2号、(76) - (81)に掲載（3月20日付）。
- (オ)国際仏教学会第20回学術会議・ライプチヒ大学大会にて西主幹が「梵文法華経写本における系統分類－PCを用いたレーベンシュタイン距離の適用－」と題する発表を行った（8月15日）。
- (カ)佼成新聞DIGITAL（8月7日付ニュース）「中央学術研究所が『大乘仏典思想叢書』第10号、第11号を発刊 仏典の理解深め仏教思想研究発展に寄与」記事の校閲
- (キ)佼成新聞DIGITAL（11月6日付ニュース）「中央学研の西主幹が「国際仏教学会」で発表 梵文法華経写

本の系統分類に新手法提示」記事の校閲

イ. 研究成果の公表等

- (ア)「梵文法華経と漢訳法華経研究ウェブサイト」(A Study of the Sanskrit and Chinese Lotus Sutra)に研究業績等を更新、および英語版のリリース（12月15日付）

- (イ)学術サイトAcademia.edu、researchmap、H-Buddhismに研究業績等を更新。

- (ウ) *Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series* 専用 Web サイトの更新・英語版リリース（12月15日付）

③布教モデルの研究

(5)法華経観に基づく社会・政策研究

①「メッセージ検討チーム」事務局

教団から発信する見解・声明などについて検討する「メッセージ検討チーム」が置かれ、学術研究室も参画している。
ア. 研究会の開催

②環境問題研究会（宗教・研究者エコイニシアティブ＝RSE）

ア. 月例運営委員会（12回）

運営委員会では、以下のことを中心に行った。

- ・RSEのこれまでの総括と今後の方向性について
- ・RSEが提唱する「新しい文明原理」の再定義

イ. ホームページ更新

上記運営委員会での討議内容、過去のシンポジウム・学習会成果物のホームページへの掲載準備を行った。

ウ. 関連学会等への参加

- ・第2回みどりGXサミット（2026年3月18日・日本農業新聞主催・於東京大学農学部）。

参加者：深田伊佐夫（学林大樹グループ）

③平和問題研究会(Rissho kosei-kai Peace Task force)

④現代宗教研究会

⑤宗教間対話研究会

⑥Kitai サイト

ア. 中央学術研究所が担当する「ちょっとマニアックなわくわくコラム」にコラムを掲載。

2月：大聖堂前面の緞帳について（北村友里江室員）

5月：「大聖堂のパイプオルガン」①（北村室員）

5月：「大聖堂のパイプオルガン」②（北村室員）

7月：法華経の教えを表す大聖堂（北村室員）

9月：フォコラーレ運動の教会ーリッピアーノのマリア・テオトコス教会（北村室員）

2. 出版事業

(1) 研究関連出版

①『紀要』の発行

ア.『中央学術研究所紀要』第54号を令和8年1月31日付で刊行し、国内外の研究者・研究機関・図書館などに謹呈配布した。本号の内容は以下のとおり。

〈特別寄稿〉

インド哲学における〈無〉をめぐる議論—共同研究進展に向けての試論（覚書）—……………丸井 浩

〈論文〉

「梵天勧請」の真実を探る—〈ブッダの覚り〉と〈如来の悟り〉—…森 章司
『ウッタラジャヤー』第2章「苦難」：和訳と註記……………山崎守一
“汝、機械を愛せよ—人工知能（AI）と隣人愛の限界—……………金 永完
縁起と無我の視座から見る人工知能—仏教哲学とAIの対話—…金 永完
日韓古典小説の理念と仏教観—朝鮮の古典小説『九雲夢』と日本の伝奇小説『南総里見八犬伝』の比較より—

……………染谷智幸
都市近郊林における産業廃棄物不法投棄発生背景要因の考察

—東京都青梅市内での建築系廃棄物投棄事例から—……………深田伊佐夫
「阪神・淡路大震災」神戸教会会員の記録と記憶

—立正佼成会の災害支援史（I）—

……………會澤健裕

〈『中央学術研究所紀要』投稿規定・執筆要項〉

〈執筆者一覧〉

〈編集後記〉

②印度学・仏教学研究誌の発行

ア. *Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series* 研究と出版

(ア) PC プログラム開発・保守・改良

黛千洋・中央学術研究所特別研究員と西主幹の共同開発によるPCプログラム開発・保守・改良についての討議（毎月1回、研究会を開催）。主な内容は下記の通り。

⑦梵文法華經写本ローマ字本電子化テキストによる集成テキストの生成プログラム開発

⑧梵文法華經写本ローマ字本におけるレーベンシュタイン距離を応用した並行・類似偈文句探索プログラム開発・保守

⑨生成AIを活用した梵文法華經写

本からローマ字翻字テキストデータ化のためのプログラム開発の検討

(イ) *Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series* 第10号（1月17日付）、および第11号（5月15日付）を発刊

(ウ) *Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series* ウェブサイトの更新・保守 (<https://www.carisaddharmapundarika.com/philosophica>)

世界の研究者らへ貢献・寄与し、學術布教を展開することを目的に、中央学術研究所の研究成果として、本ウェブサイトより *Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series* のPDF版を発信し、無償でPDF版を提供している。

(エ) CANDANA 第301号「研究所だより」欄に「*Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series 10, 11*（大乘仏典思想叢書第10号・第11号）を発刊」として、研究成果報告を掲載。

③『アーユスの森新書』の発行

④『チャングナ』の発行

(ア)「明日への提言」のテーマと執筆者：No.301（7月15日発行）／「音楽の神秘について」荒牧小百合先生（洗足学園音楽大学・聖徳大学講師）、No.302（発行は令和8年1月15日）／「学校からの排除をめぐる支援システムの構築について」白幡真紀先生（仙台大学教授）

(イ)「研究ノート」のテーマと執筆者：No.301（7月15日発行）／「西洋における「心田を耕す（VI）」綿貫丈雄室員」、No.302（発行は令和8年1月15日）／「同（VII）」綿貫室員

(2) 特別出版

① WEB 発信

ア. 研究所ホームページ「お知らせ（Information）」コーナーに最新情報を逐次更新。

イ. 令和6年度の『紀要』電子ジャーナルを公開。

ウ.『チャングナ』各号の「明日への提言」をホームページに公開。

3. 協力助成

(1) 研究員助成

3人の研究員（職員）に対し、各所属の学会費を助成した。

(2) 学者・研究者および外部機関の研究活動への協力

ア. 教団付置研究所懇話会

(ア)第23回年次大会（当番研究所：天台宗総合研究センター）への出席

日 時：10月16日（10：30～19：00）

場 所：天台宗務庁、琵琶湖ホテル

参加者：杉野恭一学林学長、西主幹、峰岸佑太（学林大樹61期生）

内 容：総合テーマ「戦後80年に考える平和への取り組み～これまでとこれから～」に基づく会員4研究所代表の発表（杉野学長「戦後80年における仏教的徳倫理と平和教育—立正佼成会とWCRPの事例を通して—」を含む）、総会、交流会ほか

イ. 生命倫理研究部会

ウ. 自死問題研究部会

エ. 宗教と法律研究部会

オ. 宗教間対話研究部会

(3)諸宗教研究機関との交流

(4)各種学会・研究会へ加入および参加

ア. 現代における宗教の役割研究会 第71回コルモス研究会議への出席

日 時：2月28日(金)13：00～3月1日(土)15：30

場 所：同志社大学今出川キャンパス 良心館地下1教室、および寧静館4階会議室

参加者：島蘭進先生（現代における宗教の役割研究会会長／東京大学名誉教授）、氣多雅子先生（同副会長／京都大学名誉教授）、小原克博（同副会長／同志社大学学長）、発題者8名、橋本所長、西主幹ほか参加者約30名

内 容：【第1日目】開会挨拶、総合テーマ「AI時代における宗教」才脇直樹（奈良女子大学教授）・師茂樹先生（花園大学教授）の講演、および石田友梨先生（岡山大学准教授）によるコメント、懇親会。

【第2日目】テーマ「宗教の現場から」齊藤舜健先生（浄土宗総合研究所主任研究員）、堀玲子先生（宗教情報センター次長）、ロバート・キサラ先生（南山大学学長）の講演、および寺本知正先生（浄土真宗本願寺派総合研究所副所長）によるコメント、弓山達也先生（東京科学大学教授）のファシリテーターによる討議

ア. 仏教思想学会第41回学術大会への参加

日 時：7月5日(土)13：00～20：00

場 所：国際仏教学大学院大学春日講堂

参加者：齋藤明先生（仏教思想学会理事長／東京大学名誉教授）、望月海慧先生（同理事／身延山大学学長・教授）、会員大学選抜の研究者7名、西主幹ほか参加者約50名

内 容：開会挨拶、会員大学選抜の研究者7名による発表、会員総会、懇親会

イ. 国際仏教学会第20回学術会議・ライプツヒ大学大会

日 時：8月8日(金)～18日(月)

場 所：ライプツヒ大学・ドイツ

参加者：西（主幹）、ライナ＝シュルツァ先生（東洋大学准教授）、梅田愛子先生（仏教学こころの研究所所員）ほか多数の国内外の 仏教研究者

内 容：西（主幹）“Systematic Classification of Saddharmapundarīka Manuscripts: Applying the Levenshtein Distance with PC（「梵文法華經写本における系統分類－PCでレーベンシュタイン距離を適用して」）”と題する研究発表、標記学会の発表の聴講、最新の研究動向の情報交換ほか

ウ. 日本宗教学会第84回学術大会への参加

日 時：9月14日(日)13：30～16日(火)15：30

場 所：上智大学四谷キャンパス

参加者：西（主幹）

内 容：公開シンポジウム「大学で宗教（学）を考える」、3名のパネル発表、コメント（藤原聖子先生（東京大学教授／日本宗教学会会長／国際宗教学宗教史学会議会長）ほか個人発表の聴講

エ. 第84回日本宗教学会パネル発表への参加

日 時：9月16日(火)

場 所：上智大学四ツ谷キャンパス

参加者：宇野室長、西主幹、佐々木室員、會澤室員

内 容：パネル発表「日本のアニミズム的宗教論の系譜をたどる」代表／外川昌彦先生（東京外国語大学教授）「姉崎正治の民間信仰論とアニミズム的宗教論の系譜」會澤室員

(3)海外諸宗教研究機関との学術交流

- ① KAICHIID ほか関係
- ② カトリック・聖エジディオ共同体関係
- (4) 客員研究員関係

- ① 「人間と科学」研究大会開催支援
令和7年度実施せず。
- ② 「人間と科学」研究誌の発行
令和7年度発行せず。
- ③ 善知識研究会の開催
日 時：10月2日（14：30～18：00）
開催方法：Zoomを使用したオンライン開催

善知識研究会の目的：

教団を取り巻く今日的課題に対して、研究所講師の諸先生をはじめ、客員研究員の先生方、教団役職者ならびに布教現場関係者の方々にお集まりいただき、交流を深め、熟議を重ね、叡知を結集して、平和で、明るい、よりよい社会の実現と教団の発展に資すること。

テーマ：

「アーカイブズの現状と課題—最新AI技術の活用を視野に入れて—」

開催趣旨：

アーカイブとは、組織や個人の活動のなかで生み出される文書をさすと同時に、体系に基づいて編纂し保存された文書の集合体のことです。戦後、歴史学界では、先の大戦による空襲や資料消失、さらに戦後の農山村の変化による資料散逸が問題視され、公文書の保存に関する法令の制定や、国や自治体に保存施設の整備を求める動きが活発になりました。さらに近年では、古文書から電子記録といった媒体を問わず、一定期間を経過して歴史的価値を有する記録やその保存施設を「アーカイブズ」と呼んでいます。宗教団体での活動記録を収集・保存する動きは、すでに日常の布教活動の中に存在しているといえます。例えば、リーフレットなどの印刷物、日誌、写真といった記録からも、教団の歩みを振り返り、現在のあり様を見ながら、今後の将来を見定めることができます。立正佼成会でも創立間もない時期から、庭野日敬開祖や長沼妙佼脇祖、本会幹部の事跡・資料を中心に、収集・保存・活用がはかられてきました。現在は関連部門・事業体の構成員による立正佼成会アーカイブズ委員会が立ち上げられ、成果の一部を「立正佼成会デジタルアーカイブ」(<https://archive.kosei-kai.or.jp/>)として公開しています。さて、人工知能(AI)と機械学習の技術進展は、アー

カイブズ機関及びその専門職においても様々なチャンスを生み出しうるものとなっています。データの大量生産によって、長期的な価値を持つ記録の特定が困難になりましたが、AIによってこのプロセスを自動化する方法が提供されています。しかし、AIには多くの課題も伴います。AIは、私たちが特定して取得する必要がある新しい記憶の形態であり、集団の意思決定や業務の証拠にもなるものと考えます。責任ある形で利用できるかどうかは、正確な情報にアクセスできるスキルを持ち合わせているかどうかによって大きく左右されます。事実、私たち宗教教団のアーカイブズの世界にはAI技術が入り込んでいます。データのデジタル化は、答えよりも多くの問いをもたらししています。今回は、基調講演者として、『大正新脩大藏経』のテキストデータベース化に長年携われてきた下田正弘先生をお迎えし、事例発表者には伝統教団から浄土宗、新宗教から真如苑のアーカイブズ関係者をお招きしました。各教団の取り組みについて情報交換を行うと同時に、アーカイブズ・コミュニティーおよび情報コミュニティーがこの領域で果たす役割や、機械学習やAIでのプロセスを基に行う意思決定において私たちはどのように説明責任を確保するか、などをテーマに議論を深める機会としたいと思います。

基調講演：

下田正弘先生（武蔵野大学教授）「AI時代における学術研究と人文学の使命—仏教の智慧に照らされて—」

事例発表：

齊藤舜健先生（浄土宗総合研究所主任研究員）「浄土宗総合研究所におけるデジタルアーカイブの構築と利用」、木船賢太郎先生（真如苑総本部教学部部長代理）「真如苑のアーカイブズとAI—未来につなぐアーカイブズ—」、北村課長（佼成出版社ICT事業部アーカイブズ課）「『立正佼成会デジタルアーカイブ』事例報告」
パネルディスカッション・質疑応答（基調講演者、事例発表者、橋本所長（議長）、本研究会参加者）

参加者：

中央学術研究所外部講師・客員研究員・立正佼成会教会長および職員・会員など約60人

ある「あおぞら図書」の風景から 渋谷 恵治（学術研究室）

「あおぞら図書」が始まって3年。地域の幼児児童生徒たち（以下、子どもたち）に佼成図書館を身近に感じてもらうために、児童書の貸し出し、絵本の読みきかせ、手芸教室などを開いている。月に1度、第3土曜日（変更もあり）の午前10時から午後2時までの4時間、保護者をふくめて延べ50人から100人のかたたちが来館してくれている。

さて、鉄道ファン（いわゆる鉄ちゃん）は子どもから大人までどこにでもいる。だからではないが、「あおぞら図書」でも、立正佼成会大聖堂周辺のジオラマ（約150cm四方）のまわりに、レール幅9ミリの鉄道模型（いわゆるNゲージ）のレイアウトを作り、自由に走らせ、また、プラスチック製の鉄道玩具（登録商標なので名前は出せないのだからプラ鉄模型と略す）も準備し、自由にレールを広げて楽しんでもらっている。

当初は「鉄道模型の遊びをとおして情操を育みたい」という、もっともな大人のねらいがあった。が、いざはじってみると、私たち大人たちが、子どもたちから学ぶこと、気づかされることばかりで、感動させられている。きょうはその一端を記録の意味で記そうと思う。

模型であるがゆえに、あってはならない脱線転覆は始終勃発する。子どもゆえに猛スピードで走らせたいし、目の前を走り抜ける電車にふれてもみたい……というのが主な原因なのだが、「スピード出しちゃダメだよ！」とか「触っちゃダメだよ！」などという野暮な声は一切出さない。長幼を問わず、自分で走らせてみて、触ってみて、脱線したら自分で修復して……という体験を通して、本人が「何か」を感じてもらえればいい。

一人の幼稚園児が誤って転覆させてしまったことがある。転覆した瞬間、彼の口から「乗っている人たち、大丈夫かなあ」という優しい小さな声もれた。乗ってもいない乗客を労わり思いやる心……。その豊かな感受性と想像力に私の心が震えた。

いつの時代もプラ鉄模型の人気は不変だ。大

人の事情でレールの数に限りがあり大きなレイアウトはできない。しかし、友だち同士で上手に折り合いをつけながら和気あいあいと楽しんでくれているのが微笑ましい。毎回驚かされることだが、同じようなレイアウトになったことが一度もない。子どもたちの芸術的な感性と無限の想像力（創造力）には圧倒されっぱなしだ。

秋、普門館跡地で開かれる「一乗まつり」に参加したときのことも忘れられない。さすがに精密なNゲージは戸外に持ち出せない。しかし丈夫なプラ鉄模型なら、子どもたちにとって安心だし安全だ。はじめ子どもたちは遠慮がちにテーブルの上にレールを広げて遊んでいた。しかし普門館跡地は広い。広いがゆえに想像力にまかせて芝生の上でレールを敷きはじめた。並べるレールがなくなると、こんどはプラ鉄模型単体で砂利道や通路の上を走らせている（あんな遊び方もできるのだなと感心の連続）。子どもらしくガリガリと力まかせに走らされるから、車体は傷つき塗装は剥げていく。だが模型ゆえに何も言わず黙々と子どもたちの要求を満たしている。そのプラ鉄模型の健気な姿は、まさに人生そのもの、人生の労苦と悲哀を象徴しているようで、私が励まされ勇気づけられた。

毎回ご家族で訪れていた鉄道好き男の子（当時小学5年生）が、ある日をさかいに姿を見せなくなった。先日、その彼が自分のNゲージを持って「あおぞら図書」に来てくれた。

「ぼくのこと覚えていますか？」

「もちろん覚えているよ。ひさしぶりだね」

「実は家を引っ越したため、佼成図書館に来ることができなくなったんです。ところが図書館近くの中学校に進学できました。何度か来てみたのですが、あいにく開催日じゃなくて。でもきょうは良かった」

小学生の時に来た「あおぞら図書」を、時を経て中学生になってまた訪ねて来てくれたのだ。「あおぞら図書」が彼の記憶と心に残っていることに感激させられた。

「あおぞら図書」が、いつまでも続くことを願っている。

所報 CANDANA 303号

令和8年7月15日発行

発行所／中央学術研究所 発行者／杉野恭一
〒166-0012 東京都杉並区和田1-2-1

電話 (03) 3382-5687 FAX (03) 3381-9771
<https://www.cari.ne.jp/>

チャンダナ

梅檀（candana）とは、印度に産する香木で、紫、赤、白などの種類があるが赤を最上とする。熱病を治す効能があるので与楽（よろく）ともいわれ、楽を与えるという。香気が非常に高いので、一葉開いても四十由旬（ゆじゅん）の悪臭を消すと伝えられている。